

## 第94回山口西田讀書會（前回10月31日のプロトコル）

参加者：福田、奈原、千葉、谷、藤本、深野、桑原、南部、佐野（9名）

### 1. プロトコルについて

前回の福田氏のプロトコルについて、南部氏から莊子（車輪作りの職人の話）と至誠（孟子）の関係は改めて考察しなければならないとの指摘があった。また酒を飲むことはそれだけならば意志であるが、味を試すことは、どれがうまいか知りたい、ということで知識である。しかしこの「知りたい」ということがさらに意志であることが再度確認された。

### 2. 福田氏の哲学的問いについて

意志について、西田は故意と過失の区別をしているのかに関して問いが立てられた。これに対して桑原氏から人間の意志は意図していた以上のものを意志している、との指摘がなされた。また西田においても水を飲むという単純なことですら、それが何のためであるかはどこまでも分からないと考えられていることが、テキスト（第3編第4章末）に基づいて確認された。そこでは「生きるためというのはあとよりくわえられたる説明」であって、「凡て吾々の欲望又は要求なる者は説明しうべからざる、与えられた事実」であるのみならず、「反って我々が之に由って実在の真意を理解する秘鑰である」とされている。

3. 講読：第1編第3章最終段落『『かくなければならぬ』と云う理性の法則』から第4章第3段落「これ等の差別は反ってこれらを超越せる直覚によりて成立する者である」まで。

#### 1) 本文要約

第1段落は前半でここ（この書物）での知的直観の定義がなされ、後半でそれは普通の知覚と同一であるが、その内容においてははるかにこれより深遠豊富なるものであることが述べられる。第2段落はこの後半部分を詳説したものになっている。

#### 2) 議論要約

(1) 第3編最終段落中「右の二者は共に意識体系の発展の法則であって、唯その効力の範囲を異にするのみである」について、まず「右の二者」とは理性と意志（欲求）である音が確認され、ついで「効力の範囲」がそれぞれ「個人を超越せる一般的意識体系」および「個人的意識」であることが確認された。それについて奈原氏から、西田は個人的意識がそのまま神や宇宙的理性といった「超個人的意識」に拡大する傾向があるのではないかと指摘がなされた。これでは妄想と真の純粹経験の区別がなくなってしまうというこの指摘は、前回の純粹経験とは何かに直接関わる問いであることが確認された。この点については今後時間をかけてゆっくり考えていくことになった。

(2) 第4章第1段落における語句の説明が「純粹経験に関する断章」(岩波版旧全集第16巻322-326頁)に基づいてなされた。「理想」については「具体的事実の統一力」のことであり、「概念」が「聴覚心像」や「具体的事実」を想起しつつ全体を統一している、というような説明が「断章」にあることから、「理想的」とはほぼ「観念的」と考えてよいだろう、との説明があった。また「弁証的」とは discursive の訳語であり、intuitive (直観的) の対語であることが確認された。ついで「断章」にある記述が紹介された。数学は元来推論的 (discursive) であるが、天才はこれを直観的 (intuitive) に解釈する、というのである。Discursive であることによって知識は何人にも理解することができるようになるが、そうはいかないのが、「美術、宗教の如き者」であるとされる。後者においては分析ではなく統一、すなわち「生命の捕捉」が問題であるからだというのである。

(3) 第2段落末「直接経験より見れば、空想も真の直覚も同一の性質をもっている、唯その統一の範囲において大小の別あるのみである」について。やはり妄想(空想)も至誠も同一の性質をもっていることになりそうである。それが「他との関係すなわちその効果」によってその「統一の範囲において大小の別」が出て来るのである。こうして我々の純粹経験はどこまでも大となる運動となる。しかしそれはどこまでも小(妄想)であることを背負い込むことでもある。一方で我々はこうした動の中を出ることができない身でありながら、他方で「宗教家の直覚の如きはその極致に達したものとされており、極大が認められている。この点をどう考えるか、この点も今後時間をかけて考えていくことになった。

(4) 第3段落「経験は時間、空間、個人の形式に拘束せられるのではなく」について。第3章第6段落末には「完全なる真理は個人的」である、との関連が問題となった。個人(私)、今(時間)、ここ(空間)は対象化されず、その意味で個人、時間、空間を超越しているとの指摘がなされた。

#### 4. 哲学的問い

今後時間をかけて考えるということになったばかりで、恐縮ですが、「普通の知覚」と「美術家や宗教家の直覚」の違いがやはり気になります。両者は「同一種」であって「その間にハッキリした分界線を引くことはできない」が、「その内容においてはるかに豊富深遠」という表現からすれば、その違いは量的なものに思われます。しかし他方で「単に数量的に拡大せられるのではなく、性質的に深遠となる」と言われて、その例として宗教家が出てきています。大小はどこまでも量的な差異ですが、極大となると大小とは質的に異なるようにも思われます。両者の関係はどのように考えるべきでしょうか。

(佐野筆記)